



水産資源を守る

鮭の人工ふ化事業

10月末になり川の水温が下がってくると鬼怒川に鮭が帰ってきてます。生まれ故郷の川から外洋に出た鮭の稚魚は、ベーリング海などを4年ほど回遊し、産卵期を迎えると、川の水のにおいなどを頼りに「母川回帰」するそうです。

今回は、鮭の人工ふ化に70年取り組む、鬼怒小貝漁業協同組合の宮田芳男代表理事組合長、藤澤和成理事副組合長、荻野忠夫理事、小堀幹也事務局長にお話を伺いました。

水産資源を守りたい

組合は、国道50号新川島橋下流側、女方にあり、鮭のふ化場としては日本で最も南に位置します。



なかきや ひろし 中木屋 宏 さん(下川島)

鮭の生態や生き様を学びなおし、改めて自然の恵みへの感謝の思いがわいてきました。



宮田さんは、組合の歴史について「ふ化事業は、昭和16年ごろから個人の取り組みとして行われていました。昭和24年に組合が結成され組織的な事業となり、以来とぎれることなく続いています」と話します。

「私たちは、鮭以外の水産資源保護にも取り組んでいます。アユ、タナゴ、ウナギ、フナなどを放流したり、魚の自然繁殖が増えるように産卵床の設置や川辺の清掃などの環境保全も行っていきます」と組合の活動について小堀さんは話します。



鬼怒小貝漁業協同組合のみなさん(左から藤澤さん、宮田さん、小堀さん、荻野さん)

自然の厳しさに立ち向かう

「自然環境の変化、河川の整備などにより鮭が自然に繁殖できる環境は少なくなってきました。そのため、捕獲・採卵し、ふ化した稚魚が自然界で生きていける大きさまで育つのを人間が手伝う「ふ化事業」が必要なんです」と荻野さんは活動の大切さを教えてくれました。

自然を相手にした活動は困難も多く、令和元年10月の台風19号では、1m以上の浸水被害を受けました。

「ふ化場も網も泥にまみれ、捕獲・採卵の時期が迫る中、復旧には大変な労力と精神的な重圧がありました。うれしかったのは、多くの人の応援があつて復旧できたことです。また、近年の自然環境の変化などで、遡上する鮭は少ないですが、鮭が帰って来た時の喜びと安堵感(あんどかん)でそれまでの苦労は報われます」と宮田さんは今までを振り返ります。

地域交流と環境教育

例年11月に開催される「鮭の捕獲・採卵の見学会」には、親子連れなどが県外からも参加します。子どもたちにとっても鮭に触れたり、重



(上) 鮭に触れる子どもたち



(右) 鬼怒川で鮭を捕獲する様子

さを体感したりできる貴重な体験の場です。また、組合のみなさんに質問できる学習の場でもあります。「今後は祖父、親、子の3世代で楽しめる釣り大会や手作りの捕獲道具を用いたイベントなど、子どもたちが川に親しむ機会を増やしたい」という荻野さんと藤澤さん。これからも組合の活動には目が離せません。2月5日(日)には、「鮭の稚魚放流会」が予定されています。ぜひこの機会に水産資源の保護や環境保全について考えてみませんか。